

## ヨーロッパのバラ園見学記

大内一弘

昨年5月17日から26日まで十日間楽都ウィーンとザルツブルグ、プラハを旅してきました。家内の音楽仲間たちの音楽三昧の旅に同行したのです。ベーゼンドルファーピアノ工場の視察は楽しかったです。音楽ゆかりの地でも音楽家の家や住まいはそっちのけでバラ園に向いました。惜しむらくはまだ開花に早く、蕾を見て歩いたようなものでした。ウィーン王宮の庭園にバラ園がありました。その一つが右の写真です。ばらを愛でるといより庭全体の中のバラの植栽による調和を図っているようです。低木植栽の中にたくさんのバラが植えられています。その周囲にあるコニファー並木の手前にあるのが、スタンダード仕立ての並木です。

小倉バラ園でも近頃たくさん育てられている仕立て方がこのように並木で鑑賞者の目線の高さに並べて植えるのは、アプローチにも応用でき、修景にも良いアレンジメントだと思いました。

右の写真はザルツブルグのバラ園。配列植栽の整然とした様式がヨーロッパ風ですね。

肝心のバラの花はちらりほらり、FL, HT, CL等ほとんどのタイプが植えられています。色彩上の工夫などは良くわからなかったですが、右のシェンブルン宮殿の庭へのアプローチにあるつるバラの壁仕立ては見事なものでした。筆者が立っていますが気温も高い五月晴れでした

から、1週間遅らせれば満開だったと思います。しかし、花に目を奪われずに、植栽のデザインや工夫をじっくり見ることができたバラ園視察でした。

あまり花が咲いていないせいでしょう。見学者もまばらなので

ゆっくりできました。広い敷地にある井川町の日本国花苑・ばら園もかような立体的なデザインを多用した修景アプローチになるとよいなと思いました。

もちろん、国花苑ですから日本庭園らしい不規則性の美を追求することも大切とは思いました。いずれこのようなバラ園見学はいつみても飽きないものですね。

### < 閑話②：皇帝ナポレオンの后妃ジョセフィーヌの貢献 >

バラの野生種すなわちワイルド・ローズは世界でおよそ200種類確認されていますが現代のバラを作出するのに必要だった基本的な祖先は10種ですべてアジア産でした。この10種のバラを人工的に組み合わせることで2万種にもおよぶ現在のバラを作り出していったのです。特に皇帝ナポレオン1世の后妃ジョセフィーヌはマルメゾン宮殿に植物園を作り、研究者が交配を重ね品種改良に多大な貢献をしました。今日、バラが世界中で隆盛を極めているのは彼女のおかげとまで言われています。もともと裕福に育ったジョセフィーヌは大変な浪費家で贅沢を好みました。特にバラに対する情熱は相当なもので、ヨーロッパだけではなく日本や中国など世界中から原種等の収集をし、その数は250種ともいわれています。

